

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 325



1998 DECEMBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

1999年H A J 登山隊員募集

アルタイ (中国側) の最高峰へ行きましょう

中国、モンゴル、ロシア、カザフスタン四国にまたがる「アルタイ」山脈は、約2000kmにも及ぶ大山脈です。その最高峰はロシア側にあります。今回は、中国、モンゴル国境付近にそびえ立つ「友誼峰・4,374m」が目標です。モンゴル側では古くから「タバン・ボグド」と呼ばれ、その主峰は「フィティン・4,422m」とされています。

モンゴル側からは、何登もされている山ですが、中国側からは「未踏」です。かつて1988年に開高健が巨大魚を求めて探索した「ハナス湖」を船でわたり、更に奥に分け入りこの主峰を目指してみませんか。興味のある方は、H A J事務局へ連絡下さい。



記

1. 日時：1999年7月24日(土)から28日間程度
2. 募集人数：約10名
3. 費用：65万円

引き続き募集中!!

- カバン峰 (6,717m) 未踏峰
- チョム・カンリ (7,048m)
- ニンチン・カンサ (7,206m)

表紙写真

成都からチベットへ向かう機窓から右下を眺めていると金沙江を越えて間もなく、純白な雪峰が次から次へと現われてくる。この山群がニエンチェンタンラ山群の東部である。7,000mを超える山こそないが、ポニントンが挑戦したセプー・カンリや長山協がトライしたチャチャチョなど鋭峰が幾多の氷河の中に林立している処女地である。(1997.7.25 山森 欣一)

ヒマラヤ No.325

1. H A J サマー・キャンプ

ニンチン・カンサ (7,206m) 西稜初登攀報告

19. ヒマラヤ・ニュース

〈地域ニュース・トピックス・インフォメーション・Books・ヒマラヤから・お願い〉

24. 寸感・事務局日誌

ニンチン・カンサ(7,206m)西稜初登攀報告

—— 雨・風雪・雷の間隙をぬっての新ルート開拓の記録 ——

はじめに

今年是中国各地で天候異変により例年にない悪天候が続いた。特に洪水の被害が報道されたが、そのために首相の訪日予定が延期されるという重大なことがあった。そのようななかでわが登山隊が登山活動を続けられたのは、中国登山協会の深いご理解があったからにはほかならない。

夏は比較的天候が安定しているといわれるが、今年チベット地区に関しては、昨年同様著しく不安定であった。連日雨、雷、雪の繰り返して精神的にもマイナスになってしまうような状態であったが、登山活動はねばり強く続けられた。

昨年に引き続き、岳人の憧れ—中国チベット自治区のニンチン・カンサ(7206m)へ、今年未踏の西稜ルートから山頂を目指すことにした。ニンチン・カンサとはチベット語で「幸福の水・幸福の源」という意味である。

この山へは1985年大分岳連隊が初挑戦したが、クレバスに阻まれて惜しくも敗退、そして翌86年春にチベット登山隊が初登頂に成功したのである。

その後日本からは1992年に自衛隊山岳連盟隊、95年に栃木高体連隊と日中友好合同隊(福岡大学と北京大学)が登頂している。昨年(1997年)は日本ヒマラヤ協会隊が南西稜から登頂した。

今年北海道から広島までの10人の隊員が集まり、正月明けから各係りを決めて準備に入った。昨年の隊員の野口さんから西稜の写真を見せて頂き、このルートしかない伊藤と顔を見合わせた。西稜ルートは地形図から読んでも分かる通り、5800mの科尔からまっすぐな雪稜が山頂まで続いている。危険の少ないすっきりとした安全なルートであると確信した。しかしすんなりと西稜ルートに決まったわけではなかった。集会のたびごとに

隊員に説明し理解してもらうようにした。

昨年のニンチン・カンサ隊では数名が高山病でBCからラサの病院へ入院という事態が起こった。今年はその教訓を生かして各隊員に高山病というものをよく自覚して頂き、特に自己管理をうながした。しかし日南隊員がラサでの高度(3600m)に耐えられず7月24日、我々の隊にラサまでお世話頂いた山森専務理事と帰国されたことは非常に心残りではなかった。

マヨン村からBC予定地まで未知のルートなので、ランカース(4400m)から日帰りで偵察に行った。その結果マヨン村から2キロくらい先まで車で入り、そこからヤクを使ってBCへ荷上げすることにした。西稜5800mの科尔からの雪稜には問題ないようだ。隊員の高度順化もまらずで、食欲もあり予定通りBC入りできた。しかしタクティクスは天候不順で予定していた通りにはいかなかった。時間は止まってくれず、ただ天を仰ぎ、神に晴天を祈るのみ…。

登攀隊長の伊藤は気圧計をチェックし、その変化を読んでいた。8月13日ころから徐々に上昇してきているようだ。いよいよ高気圧の到来だ。8月15日、田村・武部・山本の3名で仮C2(6400m)から一気にアタックに入る。晴天に恵まれ見事に山頂を踏み、安全に下山してきた。全員登頂を夢見たのだが、悪天に阻まれ残念であった。自然には勝てない。しかし未踏の西稜ルートからワンチャンスを生かして3名が登頂できて嬉しいことである。

この登山をご支援下さった日本ヒマラヤ協会事務局、中国登山協会、チベット登山協会そして不況のなか協賛を頂きました各社、その他多くの方々、また隊員の家族の方々に厚く御礼申し上げます。

(隊長：関根幸次)

アプローチ

7月19日 東京→北京

夜行寝台で東京駅に着く。H A J ルームに顔を出すと武部、長水、山本、川上四氏が前泊していた。全員が慌ただしく室内を動き回っているのので何事かと聞いたら、ガモフバックの圧力計が無いとのことで大捜索の最中であった。地下鉄を乗り継ぎ箱崎に到着した。ここでラサまで同行する山森専務理事、関根隊長以下全員が揃った。出国手続と荷物を預けリムジンバスで成田に向う。CA 926便で成田を飛び立つ。約3時間のフライトで北京に到着した。以前は直行便でも上海上空を経由するため4時間ぐらい掛っていたと記憶するが、韓国上空を飛行することで時間短縮になっている。

北京空港で中国登山協会の方々の出迎えを受け、バスにて北京市内のホテル（前門飯店）へ向う。少し休憩の後ホテル内のレストランに行く。例によって円卓を囲み食事の席についた。山森専務理事と中国登山協会の方々との挨拶があり、その後今回の連絡官と通訳の人が紹介された。そして中国の酒ラオ・チューで乾杯する。後は中国製ビールと料理を堪能した。食事の後通訳のショーヤンさんをガイドに市内の散策に出掛ける。4年前と比べ車の交通量が多くなり、自転車の交通量が若干少なくなっているように見える。中国の経済発展は喜ばしいことだが、エネルギー事情を考えると少し不安だ。省エネ、公害防止技術等の援助など、日本の役割は増々必要なのではと感じた。

7月20日 北京→成都

中国登山協会の方々を見送りを受け北京空港を離陸する。成都空港で四川省登山協会の方々を出迎えを受ける。南に下ったためか暑く感じる。

ホテルに到着後、荷物を預け昼食に出掛ける。四川省料理は辛いと聞いていたが、出てくる料理がそれほど辛く感じない。しかし真っ赤に彩られた麻婆豆腐はこれぞ四川省料理と言う辛さであった。食事後近くの武侯祠博物館に立ち寄る。その時、成都に観光に来たと言う母娘と知り合う。写真を撮ってあげ、ショーヤンさんの通訳で親睦を深めた。これも日中友好の小さな一端になったのでは。

7月21日 成都→ラサ

朝暗いうちに、バスで成都空港に向う。ラサ便は早朝に一往復しかない。これは山岳域の天候が安定している早朝をねらったことだろう。残念ながら天候が悪いのと右座席のためミニヤ・コンカ、ナムチャ・バルワは望むことが出来なかった。私にはフライト半ばころより気圧が変化しているような感覚を覚えた。他の人は何事もないように過している。ラサに何度も来られている山森氏に聞いたらラサが3600mあるので気圧調整しているとのこと。ラサ市内のホテルに昼前に到着。ホテルの階段を上がるのに非常に苦しい。今日は昼食後自由行動となり市内を散策する者、ホテルでゆっくり静養する者など自由に過す。私は夜半より頭痛と吐き気で眠れない一夜を過す。

7月22日 ラサ滞在

明方より嘔吐が始まり体調不良のため今日の隊荷整理等は休ませてもらう。他の隊員は日本より先に発送していた荷物の確認、再梱包を行ない、食料の買い出しを行なった。

7月23日 ラサ滞在

ラサ郊外の山に高所順応に出掛ける。皆さん順調に登り昼頃帰って来た。私は今日も不調で高所順応を休む。21日の夕食以来食事らしい食事をしていないので嘔吐しても胃液しか出ない。それもほとんど出なくなっている。明日はランカースへの移動となる。この状態では5000mの峠を超えてランカース入りすることは無謀と思える。又この



ままたラサに滞在して回復するか分からないため、隊長と相談し帰国させてもらうように依頼した。山森専務理事と隊長の相談の結果、私の要望を聞き入れてもらい明日山森専務理事と共に帰国することとなった。こうして今夏の私のチベットの山旅は終わったが、チベットの山旅を諦めていません。数年後にはと思っている。（日南長二郎：記）

7月24日 ラサ→ランカース

早朝日南さんと山森専務理事はラサ空港に車で出発、ハヶ岳合宿や富士登山一緒に行った山行きを思い出し、また日南さんの山に対する思いを考えると目頭が熱くなる。残った隊員は名々の期待と少しの不安を抱き、9時に3台のランドクルーザーと荷物トラック1台に分乗してランカースへ向かう。カンパ・ラ（4800m）からはヤムドクツォ湖が青く美しい。いきなり5000m近くまで上ったので頭がクラクラする。昼食休憩は湖畔で静かな景色を堪能する。ランカースの招待所に15時に到着。

招待所のあまりの不潔さに息をのむ。これだけで高山病になってしまうのではとくだらないことを考える自分が情けなくなる。

7月25日

朝食後隊長・連絡官ら6名で偵察に向かい残りのメンバーは風邪をひいた岩瀬君を残し近くの山へ高度順化に向かう。招待所に比べ何てさわやかな所か！。偵察行は車で出発しカロ・ラ（5000m）

まで小1時間さらに道を西に進み尾根を回り込み川を渡り草原の道を行くとマヨン村の集落につく。村民は昨年H A J隊を覚えていた。道案内の少年を連れ村はずれにて車を捨てBC予定地へ向かう。あいにく曇りのため山容は望めないならかな草原をゆっくり歩き尾根上にたつと眼下にBC予定地が望まれた。BCには最適などころだ。このころから天候が回復、めざす西稜が見えた。第一印象はすなおな稜線と感じた反面、適当なキャンプサイトがあるのか？西稜のコルまでのルートがわからない？の不安材料を残し皆の待つランカースに戻る。

7月26日

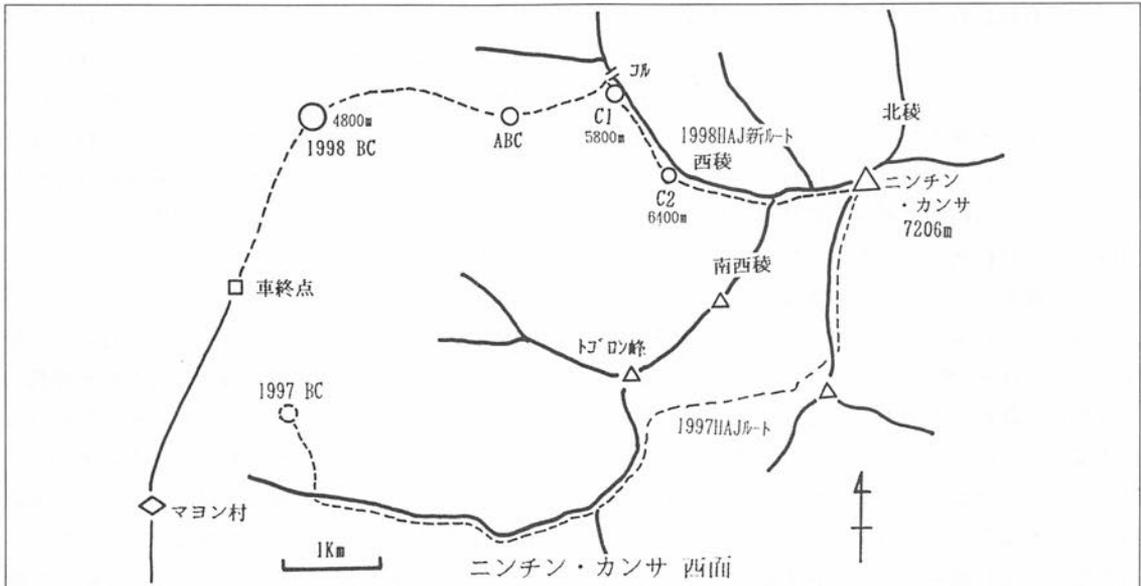
朝から小雨がふり休息後、ぬかるんだ町中を抜け全員で町外れの山に高度順化に向かう。町中は汚いが山の上から見るランカースは田圃や畑に囲まれた牧歌的な所、帰路雨が振り歌の上手な少女達がいる絨毯工場で雨宿りとなる。

BC設営

7月27日

朝8時に全メンバーあまり印象の良くないランカースを後にBCに向かうべき出発。雨の中、谷合いの道を行きカロ・ラで休憩ののちマヨン村のはずれに荷物を載せたトラックも無事到着する。

ヤク21頭に荷物を積むのに思いの外時間がかかりなおかつ積み残しも出たので昨年の隊同様2往



復とあいなるがBCまで小1時間の行程、全荷物が集結するころに雨が本降りとなり大テントにて雨宿りとあいなる。この先が危ぶまれるBC入りとなった。(清水 久江：記)

7月28日 ルート偵察

BC最初の朝は明けた。これからいよいよ頂上を目指す日々が始まるのだ。自分の登頂に賭ける熱い思いは大きくなるばかりで、そのためBC周辺の気温は5℃上昇し、氷河が溶けてBC前の川の水かさには5cm増した。しかし、それはラサで引いて以来治らないままの風邪による発熱と高度障害がもたらした幻覚らしく、現実とは言えば体を起こす事さえつらくてだるいというていたらしくで全く冴えない初日の朝であった。8時朝食、8時40分関根、田村、武部、山本がルート偵察へ。残りメンバーによりBC整備、ゴミ燃やし、洗濯など。通信担当の川上君がアンテナ設置。13時頃偵察隊帰幕。C1予定地「西稜のコル」方面を目指した偵察隊は中間地点の氷河湖まで往復してきており、そこから西稜を望見した結果、西稜初登攀の可能性を見いだしたようだ。成果を上げた偵察隊に比べ自分はといえば、朝食後食堂のメステントから自分のテントへ10m戻る途中数回に渡って頭を抱えうずくまり、昼食時はもはやメステントまで行く気力も湧かず、清水さんにおかゆを運んできてもらうという状態。しかも高所キャンプ用に持ってきた冬用羽毛シュラフをもう使っているという有様。BC整備も何もできず死んだような一日。やはりラサに降りよう、いや日本に帰りたい。考えることは弱気なことばかり。風邪薬、ビタミン剤、栄養剤を飲みまくる。夕方から雷雨。

7月29日 C1へのルート偵察

ランカースの雷雨でずぶ濡れになって以来風邪気味となった長水さんの調子がいよいよ悪く、激しい咳を繰り返すようになり休養。自分は昨日ほどではないにせよまだまだ体調悪い。8時50分C1ルート工作隊の関根、田村ら5名がBC出発。氷河湖まで順応した清水、川上、ショーヤンも同行するというので自分も行くことにする。まだまだ少し動くだけでつらい状態だが、寝たきりよりつらくとも少し動いた方がいいような気がした。川を渡り、高山植物の花が点在する草の谷を登り、

▼BC (4800m)



急斜面のガレ場を登ると透明なグリーン色した氷河湖、いかにも温暖化により後退している感じの氷河、そして西稜が現われた。デボする荷にシートをかけ、C1予定地へ偵察隊が登ってゆく。順応組はデボ荷の近くに思い思いに座り、偵察隊を見守りながらウダウダ過ごす。偵察隊は氷河から湖へ流れ落ちる数条の滝を左へトラバースしてルートを拓き、不安定なガレの詰まった急なガリーを時間をかけて登る。こちらはじっとしているだけなので体が冷えてきており、無線連絡してBCへ下る。偵察隊の報告では、滝のトラバースはそれほど悪くないが、ガレの登下降が大変だったらしい。検討の結果、C1までは距離がありすぎるので氷河湖にABCを設けることになった。

7月30日

今日は全員でABCまで荷上げのみ。長水さんも「今日こそは」と同行したが、やはり体調悪く、大きなケルンのところからBCへ下山。自分の体調は昨日よりまた少し良くなり、徐々に順応し、風邪も殆んど治ったらしい。荷物も他隊員と同じ量担ぎ、スピードも悪くない。しかし田村さんときたら皆から遅れていると思ったら30kgの荷を担いでいるという。あの年齢である体力、いまに高齢者登頂記録を塗り替えるに違いない。

7月31日

天気のいい日だ。荷上げ隊6名でABCまで荷上げ。テントを増設しつつ寄贈食品のCF撮影。BC～ABC間も踏まれるにつれだんだん道らしくなってきたが、まだ不明瞭なところもあり、ジグザグに折り返すガレ場の急斜面のターンする場所全ても含め、BCへ下りながらケルンを作る。最初はおとなしく平積みしていたが、そのうち細

工をしたものや芸術的なものを作り出し、ひとしきり熱中する。BC着後全員で昼食。16時に田村・武部・山本は今晚ABCにステイするべく出発。

C1 設営

8月1日

前日ABC入りしたルート工作隊の3名はC1予定地へ上がり、高度5800mという厳しい環境下でのドカチン作業の末斜面を平らにしてテントを設営し、ABCへ下降する。残りのメンバーは今晚からABCにステイするため寝袋等の個装を含め荷上げ。朝から雨がちな天候に出発を遅らせたが、15:35雨が止んだスキをつけて出発。しかしすぐにまた降りだし、本降りになって結局ずぶ濡れ。毎日々々雨雨雨。「えーかげんにせんかい。どついたるぞコラ」と、川上、武部から伝染してきた関西弁で空へ吠える。でも止まない。ABCから上は日本からの高所食。レトルトとはいえ、久しぶりの日本食に感激。

8月2日 悪天で停滞

天気：雨のち雨又は雨時々雨で停滞。ガスも濃



▲ABC (5200m) と氷河湖

く行動できない。日本食食っちゃ寝のうれしい一日。でも油断していると周期性呼吸で突然苦しくなったりする。BCとの500mの高度差を実感。

8月3日 BCへ一時撤退

天候不順の為、今日はC1行きをあきらめ全員でBCへ降り朝食。しばらくすると天候が回復してくる。BC前の川で洗濯、体を洗ったりと思いきいに過ごし、15時BC発でABCへ荷上げ。自分は調子が出てきたので食料を多量に担ぐ。25kgは超えてるだろうか。このザックで先頭を飛ばす山本さんに追いつこうとするが、やっぱりブッチ切られる。でも何とか二番手でABC着。また晴れてきたので皆寝袋等濡れた装備をありったけ外に並べ、さながら登山用品バザール状態となる。

8月4日

朝から雪でC1への出発が遅れる。午後天候が少し回復し、13:00ABCを出発。滝のトラバースには1Pフィックスされていたが、大したことはない。しかしその先のガレのガリーは不安定で、いつか岩雪崩が起きるんじゃないかと思うと恐く、しかも疲れる。ガリーを登り切ると氷河湖ABCを見おろす展望台のような場所があり、休憩。この先はC1手前の顕著なコルを目指し、つづら折れのガレ斜面をひたすら登る。忍耐のいる場所だ。順化の進んでいる3名はさすがに速く、離されるばかり。自分は初めての高度で、しかも昨日頑張り過ぎたせいかペースが上がらない。ルート工作隊3名はC1ステイ。残りは荷を降ろし、雪の中下山。夕食はうれしいカレーライス。夜は定期便の雷雲が来襲。ABCは安全だが、C1は恐そう。

8月5日

川上君は順応しても頭痛が残っていたが、今朝のは特別痛そうで、一人BCへ下山。11時、残り5名でC1へ荷上げ、C1の3名はC2予定地へ向け工作。この日の自分は昨日の順応のおかげでペースが上がり、一人2時間40分でC1に上がりゆっくり休憩。5月の事故で亡くなった山岳会の先輩2人の写真をとり出し、晴れ渡ったニンチン・カンサの勇姿を見せてあげた。2番手で関根隊長が来た。2人で二張目の整地にかかる。この高度でのドカチンは大変だ。最後の方になって長水さんも加わり整地終了。テントを張って伊藤・清水

を待つ。そのうち風雪になってきたのでABCへ下る。コルで伊藤・清水と合流。一緒にC1まで戻るといので、ルート工作隊に加わるべく高所装備を取りに行かねばならない自分は、一人飛ばしてBCへ下山。先にBCに降りて休養している川上君は少し回復したようだ。

8月6日 雷来襲!

C1の3名は再びC2予定地へ向けてルート工作に出発。自分はまず一人でABCへ荷上げだが、高所装備とリクエスト装備でかなり重く、おまけに体調悪くかなりきつい。ABCに着く頃はバテバテ、関根・伊藤・長水はすぐC1へ出発。自分は2時間ほど昼寝させてもらう。周期性呼吸であり眠れないままC1へ。この頃、BCから川上君もABCに上がる。関根隊長はC1ステイ、伊藤・長水はABCへ下山、途中ですれ違う。自分は更にペースが落ち、バテまくってC1に到着。隊長と5人分の夕食作りにかかり、でき上がった頃工作隊C1に帰幕。談笑しながらの食事だったが、途中から雷雲が急接近。光と音の間隔が短くなるにつれ重苦しいムードになり、箸も止まってもはや食事どころではない。「俺には当たらないでくれ」の一心で皆頭を低くし、ここまで丸めまい、というほど体を丸めて全員ほとんど便所虫状態。ついに「ピカ」「ドン」の間隔は0.3秒まで縮まり、「当たるなら次だ」と観念したら、次からは間隔があき、ほどなく雷雲は去った。「生きた心地がしない」とはこういうのを言うのだろう。もーやだ。ラサへ帰ろうよ!! (岩瀬 雄二:記)

仮C2建設

8月7日

高山病に罹って以来、妙に小便の回数が気になる。1日4ℓぐらい取ったほうがよいと云われているように、できるだけ水やお茶などで水分を補給するようにしている。今までは1晩に3回位小便に起きている。回数が多い分熟睡できず体調は不十分のままであった。他のメンバーはそんなに回数は多くなく、体調も良いようだ。

昨日は朝6時まで1回も起きることなく熟睡したし、昨夜からも朝5時くらいまで小用に起きることはなかった。これで体調も回復したかとおも

▼C1 (5800m) バックは西稜末端の5978m峰



いつつ、8時起床。朝から雨。

昨日、ルート工作隊の田村から、C2予定地の6600mまでは長すぎるので6400mのプラトーに仮C2を建設してはどうかとの意見。天候が悪く1日の行動時間が短いうえ、荷上げ力が不足している現在の体制では最良の戦術と思われる。

当初の計画では8月10日までルート工作を終了し、全員一時BCに降りて休養後、8月13日から三波にわたってアタックの予定であった。しかし、連日の悪天候の上、体調を崩す者も続出。ルートが思うように伸びないばかりか伸びたルートに隊荷が十分あがらない状況になっている。すでに予定より3日ほど遅れている。残すところあと10日ほど。未だC2建設の見通しすらたっていない。このままだと、仮C2から直接アタックにでなければならぬかもしれないし、アタックしても届かないで終わってしまうかも知れない。調子の良い工作隊に比べ、荷上げ隊は不調。隊荷は上がらず、ルートは伸びない。計画は思うように進まずイライラが募っている。おまけに天候回復の見込みはない。そんな重苦しい雰囲気になっていた。また、登山活動を開始してから、11日目、まだ、全員でのレストの日は設けていない、等々。

午前9時、C1の隊長から「今日、全員BCへ降りる。休養後、再開する。」と一時撤退の指示。疲れも溜まっていたせいも大方賛成。

11時C1のメンバーがABCに下りてくる。荷物を整理後出発。12時30分BC着。半日程度の休養だが、久々に全員和やかな表情。

14時昼食。少し晴れ間が見えたので洗濯をしたが、直後に強い雨。洗濯物はずぶ濡れとなった。

8月8日 BC

▼ゴミは分別後よく乾燥し焼却



昨夜は小用3回。BCにくると回数が多くなる。コックのサービスが良く、お茶を多く飲むせいか、小便の多い分むくみは取れるような気はする。パルスオキシメーターで測定のところ $SP O_2$ 83・脈拍数67。高山病で調子の悪かった時の数値である $SP O_2$ 49・脈拍数88から見れば相当改善し、 $SP O_2$ は80台まで回復した。しかし、どうも歩く速度は早くならないし、ボッカ力は回復しない。少し急な坂を登って大きく息を吸うときが苦しい。しばし立ち止まって、速い呼吸を数回しなければならぬ。自分の普段の登山からは考えられないことだ。今までの数回の海外登山でも、体のだるさや頭痛はあったがこのようなことはなかった。数値は戻っても体は回復していないということなのだろうか。

低い雲がたれ込めているが雨は降っていない。もう1日くらい休養したいところだが、計画が大幅に遅れておりそうもしてられない。すぐ登山活動を再開することになった。調子の良い工作隊の三人（田村、武部、山本）と若い岩瀬、川上はABC経由でC1に入り、関根、伊藤、清水、長水はABCに入ることとし、出発は14時になった。各自つかの間の休息を楽しむ。

環境担当の長水は午前中BCのゴミの焼却に当たる。焼却用の灯油は持ち上げなかったため、キッチンローソクの残りを溶かしゴミにかけ焼いた。昼は豪華なウナギの蒲焼に舌包みを打つ。

14時の出発時に再び雨、雨が上がるのを見て出発。1時間遅れの15時となる。途中は雨に遭うこともなくABCへ。少し休憩後、田村ら5人はC1へ向かう。

今日のABCはいつもと違っていた。天気の変

わってきたような気がする。今までは雲が南西方向から来て雨ばかりであったが、北西方向からになり晴れるようになってきた。頂稜は今山行始めて数時間にわたって晴れている。雲も南の方向に入道雲のような雲が湧くようになった。天気変化の兆しか。モンスーン明けではないだろうが、以後の天気回復に期待したい。体調もだいぶ良くなったので明日からC1に上がり本格的に登山活動に参加することとする。あと残すところ数日間、全力でがんばるだけだ。

夕方より雨は一滴も降らず21時頃まで晴れ、ずっとニンテン・カンサの山容が見えていた。今山行始めてのことである。

8月9日 降雪でフィックス埋まる。

少し雨がぱらついてきたが7時には晴れ上がった。少し寒くテントの水滴が凍っていた。

今日は下から上までよく晴れている。今回の山行で初めてのことだ。じつは山行終了までの間、この日が最良の天気であった。登山終了まで1日として雨の降らなかった日はなかったし、数時間にわたって晴れた日も数日となかった。

頭痛もむくみなし。今日はC1への荷上げ、そしてそのまま上部でルート工作に参加の予定。いよいよ小生にとっては本格的な登山。個人装備、ロープ、行動食を持って出発。出発間もなく連絡官と通訳の楊さんがABCまで上がってきた。少し立ち話をし11時45分出発。荷物が少し重く苦しい。伊藤、清水は途中から引き返したようだ。

よく晴れていて上部の稜線が青空に映えて美しい。上部の工作組は白い斜面に黒い点になって見えるが、遅々として進まないようだ。きっとフィックスロープが雪で埋まったに違いない。

C1着15時。C1には武部、岩瀬、川上が降りていた。岩瀬は新調したプラ靴が合わないようでABCに下山することになった。田村、山本はフィックスの掘り出しに時間がかかり19時30分C1に戻ってきた。今日のC1は田村、山本、武部、川上、長水の5人。一つのテントで食事後、明日以降の打ち合わせをし、22時就寝。

8月10日

晴れ。稜線がよく見える。7時30分起きだし水を作る。頭痛むくみなく快調のようだ。今日は仮

C 2を建設し、田村、山本は仮C 2入りの予定。テント、ロープ、食料等の荷物を持ち11時30分出発。稜線を30分ほど行くと傾斜の増す斜面になる。先頭田村でフィックスにユマールを架ける。

出発時天気良く暑いぐらいであったが、途中から吹雪き模様。下着にパーカーでは耐えられないような寒さになり、フリースを1枚着足す。

15時30分、やや風の強い仮C 2に着く。仮C 2の場所は広いプラトーになっており絶好のテントサイトである。ここからは7000mラインの稜線が手に取るように見える。6800mあたりがやや急に見えるほかは問題なく突破できそうだ。

テントを1張り設営して下山することとする。田村、山本は仮C 2に泊まることになり、山本は個人装備を取りにC 1に1度降り、仮C 2に上ることになる。

ABCから隊長が上って来ており、今日のC 1は関根、武部、川上、長水の4人。

夕方から降り出した雪は一晩中風雪模様となり大雪となった。

8月11日 6650mまでルート延びる。

朝テントの片側は50cmほどの吹き溜まり。8時起床。風雪は続いている。今日の行動は無理か。今山行初めての風雪。ABCも雪、BCは雨という。フィックスが埋まってしまわないか心配だ。3時頃まで西よりの風と雪が断続的に続く。3時頃から晴れ間が見えだす。

ABCから岩瀬がC 1に上がるという。また、仮C 2の二人は晴れの合間を見て7ピッチ伸ばし、6550mまで達したという。後3ピッチほどでC 2予定地とのこと。C 1の武部、長水はフィックスの掘り起こしに16時出発、8ピッチほど掘り起こし19時C 1に帰着。

明日は仮C 2に入り、ルート工作に参加することになる。いよいよ大詰め、がんばらなければ。

8月12日

相変わらず天気が悪い。数日前の天候パターンの変化の期待は見事に裏切られた。今日は特に風が強い。いくら待っても天候回復の兆しは見えないので準備し、11時30分仮C 2へ出発。武部、長水は仮C 2入り、関根、川上は荷上げの予定。

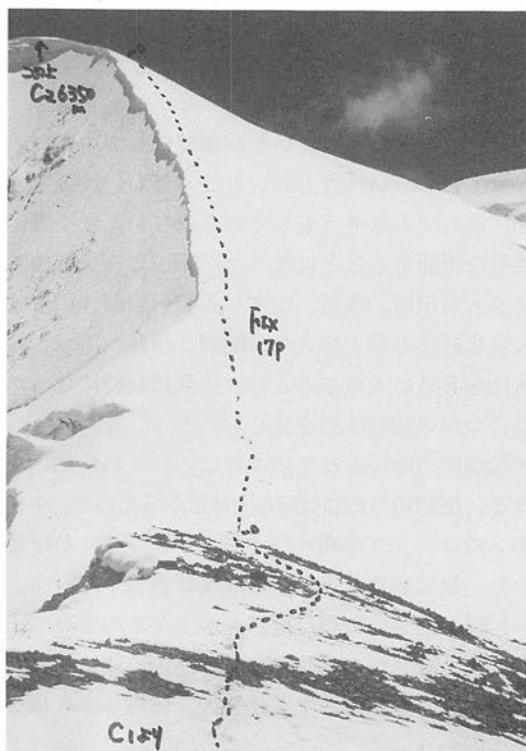
風雪模様で視界の悪い中、フィックスへ。最初

からトップに立つが全然ペースが上がらない。BCでの高山病の後遺症が影響しているせいか。3ピッチほど登ったところで隊長の関根よりストップのコールがかかる。小生の痰に血が混じているのではないかとのことであった。痰に血が混じていることは前から気がついていた。しかし、C 1では割に体調がよかったので、完全に回復し、これからがんばれると思っていた。

天候も悪いので、取り敢えずC 1に戻る。C 1で隊長から、ABCに降りるようにいわれる。できることなら、何とかC 1にでも残り頑張りたいのだが。

しかし、日程がもう残りすくないし、C 1、仮C 2の食料、ガスも不足してきている。今日仮C 2にこの荷物が届かなければ上部へのルートは延びないし、また1日を無駄にすることになる。高所キャンプで無駄飯を食うわけにはいかない。気持ちだけ頑張っても、体がついていかなければどうしようもない。これ以上隊の足を引っ張るわけには行かない。

C 1にてABCに戻ることを決意する。個人装備をまとめ下山を開始、14時40分ABC着。



▲C 1～C 2間の雪壁17ピッチフィックス

天候は相変わらず悪い。ABCのテントではなかなか眠られずいろんなことを考えてしまう。今回の山行であと自分の登頂の可能性はあるか。今仮C2に二人が居るが、補給が思うに任せない。C2を建設できればワンブッシュでピークを狙えるが。リミットが16~17日として4日間あるが可能性は薄いであろう。

8月13日 上部キャンプ設営できず…

起きると一面の雪。上部の仮C2は雪ではあるが風がなくルート工作にでるといふ。C1では川上の調子が悪いため、関根、武部の2名で仮C2へ荷上げの予定という。ABCの岩瀬は燃料補給のためC1へ荷上げ、伊藤、清水、長水は足りなくなった燃料補給のためBCへ降りることにする。

久々にBCで昼食を取る。しばらく休憩後ABCに戻る。

田村からは仮C2をC2とし、アタックしたいとの希望が出される。関根、武部の荷上げ隊はフィックスの掘り起こしに時間を割かれ途中でデポする事になった。また上部の工作隊も仮C2の食糧が不足になりC1に降りることになった。

今日のC1には関根、武部、川上、岩瀬、そして田村、山本が入る。明日は、田村、武部、山本がC2に入り、岩瀬がC2まで荷上げする予定という。そして、15日に仮C2からアタックする事になった。

8月14日 アタック体勢に入る。

いよいよ14日。今日C1から3人が仮C2に入り、15日アタックすることになる。20日にはBCを撤収する事が決まっており、余すところ5日間。各キャンプの撤収などの日程から逆算すると最初で最後のアタックになるかも知れない。

ABCは10時頃から雨、稜線は雪で見えず。アタック隊は雪の中、フィックスを登り続けていることだろう。

ABCでは特にすることもなくシュラフに入ったり、お茶を飲んだり、行動食を食べたりするだけ。雨は降り続き、たまに稜線が見えるだけ。19時過ぎようやく穏やかになった。何もすることもなくシュラフに入っているとあれこれ考えてしまう。自分の体力不足や自己管理の弱さが原因の全てだが全く情けない話だ。

午前3時前、小用に起きると、薄曇りに月と星がきれいに見える。この天気だと、きょうのアタックはきっと成功するだろう。（長水 洋：記）

登頂

8月15日 アタック

田村、武部、山本のアタック隊は3時に起き、6400mの仮C2を6時に出発。幸先よく晴れる。ピバーク用具一式、フィックスロープ4本を持つ。雪の状態は上々、風なく寒くなく、フィックスに登降器もよく噛んで、8時、6700m台の頂稜下の雪壁基部に至る。無線を入れ、激励を受ける。

チベット高原西部に陽が当たり始め、しばし眺めて感慨がある。荒涼として広がる5000m台の山波を眼下に見て改めてチベットにいるという実感があり、冷たく爽やかな高所の空気を感じ、登高意欲が高まるのだった。登頂を確信した。

フィックス終了点からデポロープで田村がさらに5ピッチフィックスし、その上さらに山本が2ピッチ敷設する。C2から計18ピッチ。これで下降用のロープ2本を除いて全て使いきり、頂稜まではフィックスなし。目測は頼りないが、この先は多分3、4ピッチぐらい。山本は傾斜は60度はあるというが、そんなにあったら大変だ、せいぜい45度を越えるぐらいだろう。山本はスタカットを主張したが、その必要はないと、田村が丁寧にステップを蹴り、思ったより早く頂稜線に出る。時は13時頃。

頂稜は東に伸び、ガスがかかって先は明らかではないが、南側も切れ落ちていて、雪庇が見える。緩い尾根をしばらく東へ行くと先が落ちている広い台地に至った。私の簡易高度計も7000m台を示していて、ここが頂上だということになり、勇んで無線を入れた。喜んでいると、ガスのなかに、さらに東に鞍部を挟んでぼーっと、お化けのような高い峰が現れた。ばつの悪い思いで登頂を取消し、疲れた体に鞭打ってさらに東へ向かう。

幸いなことに別に問題のない鞍部に30mほど降り、メドーサの頭のようなうすきみの悪い模様の氷の衝立の脇を登って、2ピッチぐらいで頂上に出た。東側の風に洗われた雪面に古い足跡のようなものがみえる。たぶん去年のものだろう。頂上

は南側に弧をかくて弓なりに東西に長く、念入りに東の端まで行って登頂を宣言する。時は15時40分。隊長、連絡官から祝福を受け、なによりも無事期待に添えたことが嬉しい。あたりはガスが多く一部を除いて遠景は望めない。私は弟の散骨をした。山本も同じことをやっていた。

さて、退散、頂稜の端に帰って毎度の定時現象の吹雪となった。スノーバーの支点で2ピッチ下降してフィックスに至り、日没寸前にC2に帰幕できた。19時過ぎだったろう。

8月16日 山本、雪目になる。

C2撤収の予定だったが、困ったことに山本が雪目にかかり、目をあけられないという。昨日行動中、曇っていたのでサングラスをしなかったらしい。昨夜夕食中から痛みだし、雪で冷やし続けたものの回復しなかった。たいがい一晩冷やせば治るものだが、酸素不足の高所では遅いのかもしれない。高所では、散乱光だけで雪目を起こすに充分である。これも経験というものか。仕方がないので武部一人に降りてもらい、私は付き添って一日様子を見ることにする。

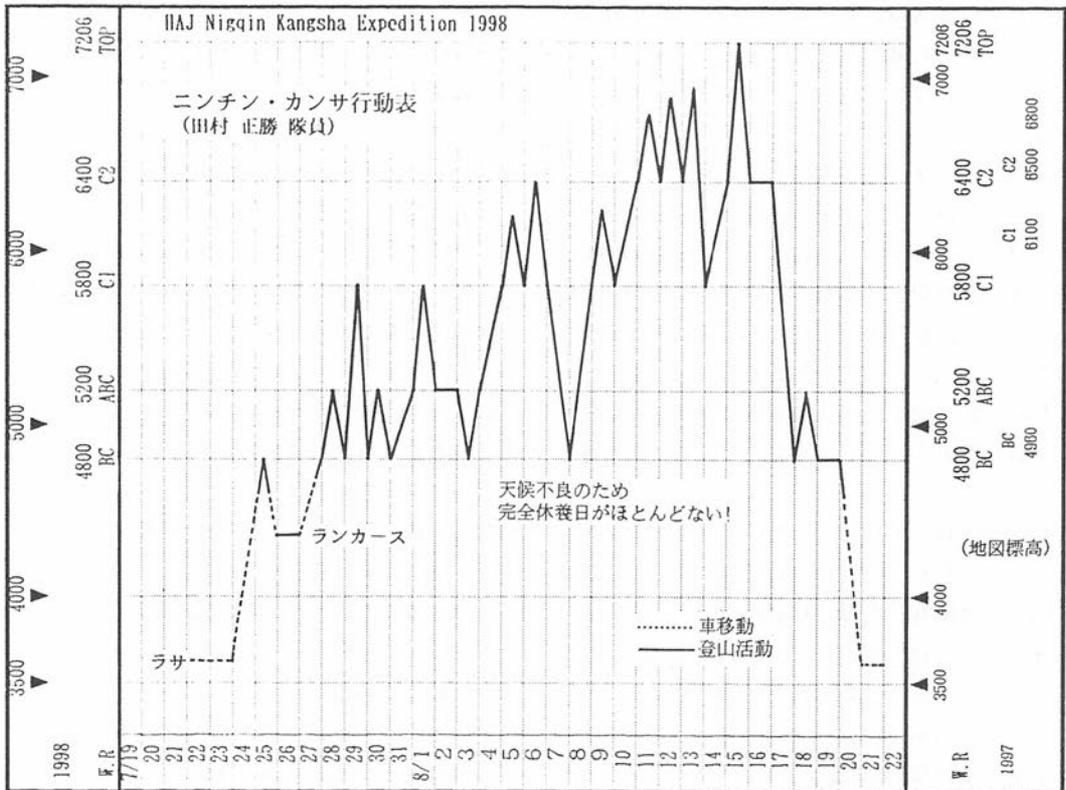
昼間は晴れ、暑くなる。たぶん昨日アタック不

可だったとしても今日でかけたことだろう。明日の撤収に備えてテントの周りの除雪をする。積雪はテントの高さを越し、周りにできた吹き溜まりで辺りの地形が変わってしまった。ここでは風雪は期間中ずっと南から吹いていた。夕方から山本の雪目が次第によくなる。

8月17日 フィックス 撤収

昨夜うつらうつらしながらしきりにフィックスの撤去について考え、ロープが首に巻きついたりした夢まで見た。無傷の処女地にずかずかと踏み込んでロープを敷設し、そのままにして跡を汚すというのは、たしかに気分のよいものではない。下からは残置の指令を受けていたが、幸い雪壁の単純ルートであり、体力も時間もあったので、上部はともかく、C2より下を撤去したいことを伝えた。無理しないようにという返事。

昼近く、山本にはテントその他を背負って降りてもらい、私は個装だけで撤去しながら下降。C1の岩瀬にサポートを頼み、空身で登ってもらう。結局スノーバーの支点は残置し、それにダブルで通して引っ張って回収するという方法である。順調に5ピッチ回収したところで岩瀬と合流。時間



はどんどん過ぎ、C1撤収隊はしびれを切らして下に降りる。さらに6ピッチ撤去し、打切り。下部は埋没していて回収不能。そして傾斜が緩くなるにつれ、ロープと雪との抵抗が増して引っ張り辛くなるのである。17ピッチ中11ピッチ回収。全然やらないよりは良かったと考えている。クリーン登山の姿勢を示せたわけだし、我を通せたことで自分の精神衛生上も満足であった。始末はC1跡に来年隊用にデポという、おかしなことも考えたが、これでは半端の上塗りに墮ることになるだろう。岩瀬の頑張りでも全部BCに降ろすことができた。

フィックスの撤去は難しい。撤去はたいがい撤収のついでとして組みこまれ、余裕がなければ見送られる。撤収時には物量的にも時間的に体力的にも精神的にも余裕のないのが普通である。というよりも、残置は密かに最初から予定されていると言ったら言い過ぎだろうか。そして仮に専用隊を編成できたとしても、それじたい危険であり、不可能なところもあり、天気次第であり、恐らく半分撤去できれば上出来だろう。今後期待されることは、ルートを行動中のつれづれに、努めて目につく古い残置を撤去する、ということだろう。全員BCに集合。

8月18日

昨夜の大雨もどうにかあがり、午前中、全員と通訳のショーヤンとでABCの撤収完了。山本が両目の焦点が合わないという。たぶん疲れからだろう。O2キャンドルを一本吸ってもらおう。やがて治ったらしい。

8月19日 未明 BCテント潰れる。

明日の撤収前の隊荷整理。目まぐるしく変わる天気の間をぬってテント干し、その他整理に忙しい。

夜中、隊長の声で目をさますと、湿雪でテントが潰れていた。はいだし、メステントに移る。完全に潰れ、平らになってしまった。他のテントは雪を払ってどうにかもちこたえた。わずかながら傾斜地に張られていたためバランスが悪かったらしい。このユーレカという大テントは居住性は申し分ないが、降雪には注意がいる。一応ポールはラサで修理済である。

▼C2 (6400m) と上部ルート



朝、5、6cmの積雪であたりは真っ白だった。これでわれわれの夏は終わったのである。

(田村 正勝：記)

登頂記 1

8月15日(土) 午前3時30分。高度6400mの第2キャンプ。1張のエスペーステントの中、田村さんの「起きよう。」という渋い声で目覚める。テントの出入口をあけ外を覗くと、なんと星と月がでてニンチン・カンサの山塊を照らしているではないか。ありがたい天候。ガスが多少でているが行動に支障がない。ベースキャンプを建設して以来ほぼ毎日が、5000m以下だと雨、5000m以上だとみぞれか風雪だった好天がほとんどなかった今夏のニンチン・カンサ峰にあって例外的な天気だ。そしてラッキーな天気が今日1日のみの1チャンスのアタックを約束してくれていることをこの第2キャンプの3人(田村、山本、武部)は暗黙に解っていた。そして7206mの頂上まで未踏の西稜を850m登り、おりてこなければならぬので、12時間行動はまちがいに覚悟しなければならない。朝食を多めに意識して食べ、水を多量につくり充分な程飲む。そのため出発まで起きてから3時間もかかってしまった。

午前6時30分まだ暗い中、ヘッドランプのスイッチをオンにし雪面を照らしながら出発する。第2キャンプから上部も雪壁の連続で南西稜とのジャンクションに続く。すでに、この上部も数日前に田村、山本パーティーで10ピッチ程固定ロープがフィックスされており、フィックス終了点までは、ユマールをセットし比較的速度をあげて高度を稼ぐ。未明の高所の風が気持ちよい。少しずつ

明るくなりはじめると、北には遠くニエンチェンタングラ山群かと思われる雪山群が目映る。登行してきた登路を振り返ると、はるか下方にベースキャンプ、氷河湖にABC、コルにC1、西稜雪の台地にC2と各キャンプがはっきり見える。逆に各キャンプからは我々3名の動きが一挙手一投足ははっきり見えるので、チョンボはできない。改めて気持ちを引締めて登行を続ける。

第2キャンプからの西稜上部は雪壁、雪稜の連続で、斜度が一部分30度程になっているが、雪の状態はひじょうに良い。フィックス終了地点からは、そこにデボしていた固定ロープを持ってさらに8ピッチ、南西稜とのジャンクションめざしフィックスしていく。それでも届かない。南西稜への最後は正面左にあるクーロアル状の雪面を2ピッチノーザイルでステップを深く作って左上していく。斜度はあるが、雪の状態よく怖さはない。

午後1時30分西稜を登りきる。南西方向にはガスの切れ間から近くトゴロン峰の雪の峰が下に見える。主峰へは南西稜を登行していくが、主峰方面はガスがかかり視界が悪い。下降時を考えて、この地点に赤旗を立てておく。南西稜上は、雪が腐っているので、アイゼンを脱ぐ。バイルもデボしておく。

主峰へは東に向って進む。くるぶしまでのラッセルで行く手右側、南側のカロ氷河源頭への雪庇に注意を払いながら、赤旗を要所要所に立てながら進む。

午後2時20分濃いガスの中、前方が下っている地点に着く。どうやら頂上らしい。10分程待ってもガスが晴れない。完全にホワイトアウトの中だが、高度計も7100m指している。田村さんと話しあい『頂上である。』と判断する。すると、急に感激した気持ちになった。ABCで指揮をとられている隊長はじめサポートで入っている各キャンプと交信する。田村さんから隊長へ交信第一報。「只今、頂上に着きました。西稜を完登しました。ありがとうございました。……。」山本さんも、感激興奮状態。3人抱きあい感激に酔う。しかしその時、東側が一瞬ガスが晴れる。ガスの切れ目からは、目の前になんと、さらに100mから150m程高い雪のドームがあるではないか。3人啞然と

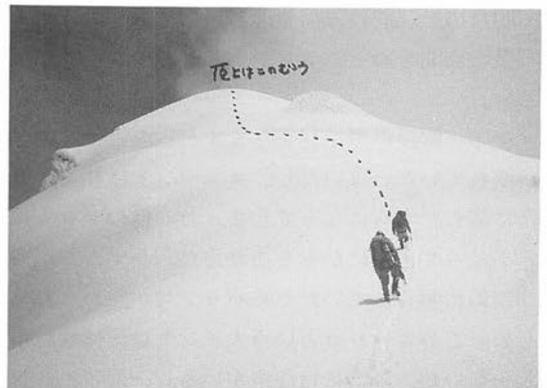
して「あれが頂上じゃないですか。」すぐに状況を隊長に交信し報告する。ABCの隊長も各キャンプも愕然となる。「ともかくあれを登るしかありませんね。」単純な雪のドームの登りで問題はない登路だが、気分的に愕然状況なので一番辛い登りとなる。今いるピークは北西支稜とのジャンクションピークとわかり、ここから一担20m程雪面を下降し、雪のドームを正面を喘ぎながらじわじわ登る。登りきるとさらに稜線が続くがほとんど高低なく続く。やがてガスの中から北稜が見えだす。3人そろって進む。

午後3時30分やっとニンチン・カンサ主峰の頂上に着く。「幸福の源」である聖山の頂上に最後の赤旗を立てる。

「関根隊長。感謝ありましたら応答願います。こちらアタック隊。」「さき程はどうも申し訳ございません。今、本当の頂上に着きました。みなさんのご支援ありがとうございました。」と田村さんの落ちついたしかも少々照れくさい声が頂上に響きわたる。「頂上に着きました。西稜という新ルートから登頂させていただいて本当にありがとうございました。いろんな方々からの支援を登頂という形になってうれしい限りです。」正直言って天候のこともあり、順化がうまくいかないメンバーのこととかで登頂できないかも知れないと思っていただけに、うれしい思いでいっぱいでした。

頂上は、ガスの中と言えどもさわやかな7000mの風が吹いていました。

午後4時、ガスの頂上を後にし下降に移る。ドームの下りは下降1ピッチ目を懸垂下降する。いっこうにガスは晴れない。赤旗をたよりに、トレー



▲頂上ドームへの最後の登り

▼にせピークからガスの切れ「目」に主峰を見る



スどおり進む。

午後4時45分。西稜下降地点の赤旗地点に戻る。戻るころより風雪激しくなり吹雪だす。登行時ノーザイルの2ピッチの所は予備スノーバーを支点にとり懸垂下降する。夕暮れせまる吹雪の中、18ピッチの固定ロープをたよりに第2キャンプまで延々と下降してゆく。雪が積っていたので、固定ロープを掘り出しながら1ピッチごとビレーを確認しながら下降する。

午後7時45分。武部が第2キャンプに到着。少し遅れて山本さん、田村さんが到着。吹雪が激しくなっていて、テントのまわりを除雪しはいる。13時間30分のフル行動。遠征中、一番のザ・ロンゲストディだった。

隊長、登攀隊長に3人無事帰幕したことを報告し、水を多量につくりほっとしたのは、午後11時を過ぎていた。「しんどかったけど、今日の1チャンスを最大限にいかしたね。よかった。」と田村さん。そのかたわらで山本さんが雪盲のため目が痛い痛いと大変。ともあれ登頂がおわり無事第2キャンプにもどった。

翌日は、朝から吹雪、隊長、登攀隊長と交信で田村さんは山本さんに付添い第2キャンプにもう1泊。武部は、正午にABCにむけ下降。メンバーの祝福を受けながら、3人が再び会えたのは、8月17日午後3時30分ABCにてだった。

隊員全員の力でニンチン・カンサ峰西稜を初登攀でき、登頂でき、事故なくベースキャンプにもどれたこと心から感謝します。

そして1チャンスを与えていただいたチベットの仏様に感謝します。

(武部 秀夫：記)

登頂記 2

8月13日、6600mでルート工作中的の5ピッチ張り終わった15時に関根隊長・武部さんが悪天候で仮C2に荷上げ出来ず、C1に引き返したと隊長から無線が入る。前日につづいて2度目。ルート工作中的の田村さんと私にとっては今晚の食料しかなく、明日から食料無しになってしまう。

登山期間も残りわずか、毎日が悪天候で5200mのABCから下は雨、上部では常に風雪が伴いルートが思うように伸びず、登頂するためには1日でも早くルート工作を終えアタックしなければならない。しかし、食料の事を考えるとC1に降りるしかなかった。15時、下山開始。

今日もいつも通りに雪と風と雷の3拍子が我々を歓迎してくれた。雪と風だけなら分かるが、毎日雷が伴う記録は読んだ記憶が無い、と思いがら下降する。雷は馴染めない。

18時30分、C1に到着。関根さんらが出迎えてくれる。夕食の最中、間近で落雷が起きているため稜線上に立っているこのテントにいつ落雷が落ちるか非常に心配であった。雷が落ちるたびに背中が丸くなって行き、みんな小さくなって食事をした。せっかくの親子丼の味が半減した。この日、田村、武部、山本の3人が15日にアタックする事が決まる。

14日11時、隊長、川上さんに見送られてC1を出発。隊長に「必ず登頂してきます。滑落の危険はありますが、雪崩の心配は少ないです。」と言って握手を交わす。アイゼンに雪が頻繁に付き何度もピッケルで落とす。時間と共に風が強くなり寒い。50度の雪壁を登るには最悪の条件になって来



▲本当のピークにて武部(左)、田村(右)

た。たたきつけるようなアラルが降り、顔が痛い。視界も悪くなる。16時、強風下無事仮C 2 到着。岩瀬さん初の6400mラインの記念写真を撮る。岩瀬さんが「頑張ってください。」と言ってチーズステックを10本置いて、強風下C 1 に戻って行った。

20時15分、なかなか寝つけず23時、小便で外にでる。空は曇りで星も見えず。明日の起床は午前3時に誰かが目が覚めたら起こす約束である。早々にシュラフに入り込む。寒さは極端ではないが寒い。再度目が覚める。シュラフの中で時計を見る。0時53分。3時まではまだ早い。なぜ目が覚める？緊張のせい？アタックするのに緊張するとは情けないと思いがちまた寝る。

15日 3時35分、起床。石狩雑炊で食事の用意。住まいが石狩なので、石狩雑炊を食べるたびに家族の事が頭に浮かぶ。再度お茶を飲み、5時登攀用具の分配を行う。軽量化のためロープの本数を減らして持って行くことになる。

6時30分、出発。まだ暗い。ここに来て初めて星空を見る。風も非常に弱く、無風と言って良い。ヘッドランプを付けて出発。薄明りを頼りにフィックスにユマールを掛け戻り始める。田村さんは快調に2ピッチ目を登っている。身体は軽くはなくやや重い。荷物は10kg程か？出だしから50度の雪壁を5ピッチの登りはきつい。月が山影から出てきて月明りとなる。月と星を見るのは始めてである。気温は-5℃程寒くはない。しかし、足の指と手が冷たい。太陽が早く出てくることを願う。

8時、田村さんが7ピッチ登った所で定時交信を行う。明るくなり天気は快晴。登っている間、朝日が眼下の雲の切れ目について北西方向の朗雄久川を照らし、非常に美しく、初めての光景だ！こちらは西側になるため、太陽が出るのはもう少し遅くなる。今までの中で、最高の日和である。

9時30分、12ピッチ目のルート工作終了点に到着。標高6600m。傾斜角度60度。今日の1ピッチ目を田村さんがリード。15分後、田村さんは斜面を掘って支点を作る。5ピッチ目、山本リード。今回のヒマラヤでの最後の2ピッチ、後悔しないように楽しく登ろう、と思いがちながら登る準備をする。持っているロープは4本。昨日の打ち合わせ通りに「2本は持ち歩く」を再確認する。田村さ

んにビレーをしてもらい、雪壁を登る。雪面は蹴り込めば10cm程食い込む硬さである。足を滑らさないように注意をしながら登る。この傾斜ダブルアックスだが緊張が走る。「中1と小2の娘のためにも死ねない！」……。 「ロープいっぱい」の声がかかる。6ピッチ目、登る準備をしながら、田村さん、「これで最後です」と話す。初ヒマラヤのリードもこれで最後、と思いがちながら直登する。稜線まではまだまだ遠い。ロープが足りない。足りない分はコンテか？と思いがちながら張り終える。時間は12時30分。初遠征で36ピッチ中18ピッチもリードさせてもらえたんだから、幸せ者だ！これより先は傾斜もいく分落ちたので空身で慎重に登る。13時30分、7000mのコルに到着。足元を見おろす。おお急斜面!!!数分後、武部さんも登って来る。降り口表示のため赤旗を立てる。頂上まで高さ200m。見た目でも傾斜は20度、天気は暖かく雪は解け表面はざくざく状態。田村・武部さんはここでアイゼンを脱ぐ。私は持つと重いので履いて行く事にした。これが失敗であった。途中で脱ぐことになる。強い日差しを浴びながら歩く、雪の反射が強い。左側は赤茶けた山々が低く見える。右下は稜線で見えないが遠くに雲の合間から山らしきものが見える。後は雲が多くて何も見えない。熱い。アイゼンに雪が付く。ある程度のスピードで歩いているつもりだが遅い。今、我々は世界で初めてのルートを歩いているのだ。頂上はどうなっているのだろうか、などと気持ちが高まりながら歩く。

14時40分、コルからだいたい歩いた。この稜線の奥の方は雲で良く見えないが、すぐそこからは下りになっている。周りに高い所がまったく無い。「ここがピーク！」、田村さんがBCに無線を入れる。田村、武部、山本と登頂記念交信をしている時、前方の奥の雲が晴れ、眼の前にポコンとした角度のある山が見えた。どう見てもここより20mは高い。「なに一向こうが頂上か?!」となり、隊長に「すみません。我々の立っている所頂上ではなかったです。今、奥の方の雲が晴れてここより高い所が出て来ました。今から向かいます。」と言って無線を切った。何で下り斜面の奥に頂上があるんだ！と独り言を言いながら30度程の斜面を

下り、少し歩いてコルになる。コルからは少し歩いて40度近くの斜面を100m近く登る。左側に岩肌を覆った雪壁があり、右側にはポツポツと雪で覆われた10m程の小さな山が見える。この登りは疲れた。半分登った所から足が重く早く着かないか？と何度も思った。

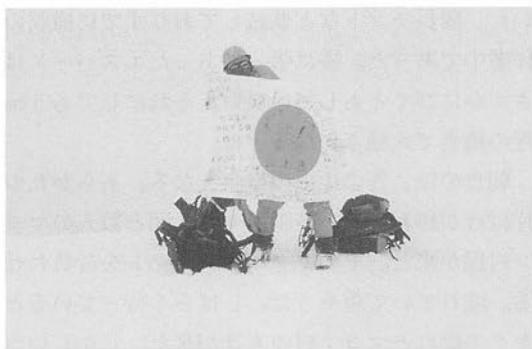
15時40分、登り切った所から稜線づたいに行ける所まで行こう。再度失敗をしたくない。ガスと雲で視界が悪いが70m程歩いた所で、斜面が切れ下がっている。北稜ルートも見える。周りには高い所が無い。今度こそここが頂上であることを確信する。「やった！頂上だあー」と喜び合い、3人で握手をする。さっそく隊長と無線交信を行う。田村さんが「間違いなく頂上に着きました」と交信を行う。私は「隊長をはじめ、皆さんのおかげで登頂できました。」と御礼を言う。無線交信後、ちり紙に包んだ母の一かけらの遺骨と伯父の遺骨を埋葬し、手を合わせる。お盆のこの日のお墓参りに行けないお詫びと、ヒマラヤの地の頂上に立ったことを報告する。母と伯父の死については、自分の対応が早ければまだ生きていたのに、と後悔する思いがあるため涙が出てきて、涙を流しながら雪で覆う。2000年北海道エヴェレスト登山隊が日章旗を贈ってくれたので、記念撮影を行う。風が強く旗はバタバタと音をたててなびく。記念撮影が終了時、「これでお世話になった皆さんに良い報告が出来る。」と思うと涙が出てきた。エヴェレスト隊への恩返しは登頂であるので、よけい涙が出てきた。雲も出てきて天候が悪くなって来た。

16時、下山開始。風も強く雲もあり天候が悪くなって来た。下り斜面でロープを出し、懸垂で降りる。今度は登り傾斜があるため、どうもスピードが遅い。風と雲で天候が悪い。視界は50m。時間も16時過ぎ毎日のパターンで、風・雷雲が出て来るパターンか？と頭をよぎる。今、雷雲の中か？と思うとあせる。登り切ると風を伴って雪が強くなって降ってくる。あっという間に足跡が消え視界は10m以下となる。前には武部さん。後ろには田村さんが居るはず。両方とも見えない。後方の田村さんは大丈夫か？と思い叫んでみる。反応なし。コルの赤旗が見える。経験豊富な人なので赤旗で待とう、と思い進む。武部さんが居た。まも

なく田村さんが到着した。

17時、コルに到着。ロープを出し田村さんがスノーバーをセットして懸垂の準備を行う。雪が激しく舞いサングラスに雪が着くため、先ほどからしていない。少し暗くなって来た。太陽は厚い雲に覆われている。武部さんが先に降りて、次に私が降りて行く。最終フィックスを示している赤旗は遥か下にある。あと1回ではとどかないと2人で話す。田村さんが降りて来る。2ピッチ目の懸垂準備を行う。スノーバーはこれで終わりである。次の懸垂用スノーバーはない。武部・山本・田村の順で下降する。降りたがとどかない。やはりかと思う。10m程足りない。クライムダウンで降りますか？との話が出るが、ここまで来たのですから肩がらみでもいいのでロープ着けて降りましょう、となり田村さんが降りて来るのを待つ。スタンディングアックスピレーで武部さんを確保し降りてもらい10m程でフィックス終了点に着く。次に田村さんに確保してもらいフィックスに着く。これで暗くなくても仮C2に帰れると思う。武部さんに先に降りてもらい、田村さんを確保する。田村さんも無事フィックスに到着する。これで3人も無事に帰れると思うと嬉しくなってくる。先に私が降りて行く。18ピッチの懸垂は長く、風・雪が舞いあたりは真っ暗になっていた。

19時30分、仮C2に3人無事に到着する。13時間の戦いであった。3人で喜びあいながら食事の用意をしていると何か物が見つらなくなって来た。おかしいと思いながら目をこすっていると、15分後には目が痛くて目を開けていられなくなってしまった。雪目である。目が見えない状況で食事をすまして、雪で目を冷やししながら寝たが目が異常



▲やった……頂上だあー 山本強

に痛い。失明してしまうのでは、と思う程である。

16日、朝目が覚めたが目が痛くて、開けることが出来ず。田村さんにご迷惑を掛けるが、もう1泊する事となる。目が痛い、目が開けられない。

17日、朝方、小便で起きたら目の痛みもほとんど取れ、下山出来ると感じた。8時、定時交信で今日仮C2を撤収する事を決める。

12時、テント・ゴミ等を背負って下山開始。荷物が異常に重い。下山途中仮C2から8ピッチ降りた所で、フィックス回収に上がって来た岩瀬君とスレ違う。「おめでとうございます」と言われて握手をする。嬉しかった。C1では川上君が「おめでとうございます」と言って出迎えてくれた。ABCでは関根隊長他の皆さんが出迎えてくれる。

BCに戻って来たら通訳のショーヤンと抱き合っ
て喜ぶ。連絡官とコックさんと握手して喜ぶ。夕
方、田村さんも戻って来る。全員無事にBCに到
着する。夜、登頂祝いで約1ヶ月の禁酒を解きビ
ールを2缶と日本酒コップに2杯飲む。おかげで次
の日から、また目に異常をきたし物が二重に見え
るため、1日半寝込むはめになってしまった。

今回、登頂することが出来たのは隊員の皆様・
職場をはじめ多くの皆様のおかげです。家族にも
辛い思いをさせましたが、深く感謝しています。

(山本 強：記)

下 山

8月20日 BC撤収～ラサ

朝まだ暗い頃、夢の彼方で何やら騒いでいるな
と思っていた。次第に騒ぎが現実のものとなり、
起きてみると積雪があり、テントが押し潰されて
いた。隊長テントなど壊滅しておりすでに撤収の
作業中であった。隣に張ってあったエスペースは
さすがにびくともしていない。それにしても5cm
程の積雪で大騒ぎになるとは。

朝食の後、雪の中での撤収となる。あらかたの
片付けが終わった9時頃、ヤク1頭と数人のマヨ
ン村民が来た。そのヤクにメステントを背負わせ
る。濡れていて重そうだ。しばらく待っていると
ヤクの群れとマヨン村の人達が来た。しかしいつ
まで経っても荷役作業が始まらない。村人達が連

絡官を相手に賃上げ交渉をしており、罅があかな
い。雪の中で待つのは寒いので、隊の半分をマヨ
ン村で待つ車まで先行させ、残りが隊荷の管理を
受け持つことになった。

ようやく何らかの妥協点を見出したらしく、ヤ
クへの荷積みが始まるが、移動し始めたのは昼頃
だった。動き出してもヤクから頻繁に荷物がこぼ
れる。尾根の上でこぼれたプロパンボンベが谷底
まで転落し、牧童が拾いに行く。遠く離れたヤク
まで荷物を持って行き、再び荷を載せる。すると
また他のヤクが荷を落とす。午後3時を回りよう
やくマヨン村に到着。トラックに荷物を積載し、
余った行動食を子供達にあげていると物凄い人だ
かりになってしまった。行き渡らなかつた子供達
には悪いが、きりがないので急いで車に乗り込む。
雨が多かつたためか、道路は所々土砂流で埋まっ
てしまっている。何とカロ峠の手前で、トラック
が増水した河を渡りきれずにスタックしてしまっ
た。ランドクルーザーのウインチで引き上げよう
とするが、調子があまり良くないのでかなり難渋
した。ヤムドクツォ湖近辺の道も崩壊が激しく、
トラックが無事にラサまで着けるか心配する程だ
った。

隊員を乗せた車は夜10時頃にラサに到着。時間
が遅いので街へ出ての食事となった。ホテルに戻
り、3週間分の汚れを落としてきれいになり、天
国の心地のベッドで寝る。

8月21日 ラサ 荷物整理

疲れが残る体で荷物の整理となる。荷物を積ん
だトラックは、信じられない様な悪路を走破して
明け方3時半頃、無事にラサに到着したそうであ
る。ところが西藏登山協会の広場に行くと、運転
手が疲れて寝ているそうで、まだトラックが来て
いなかった。無理からぬ話だ。

11時頃、トラック到着と同時に荷物の整理が始
まった。テントを張り、乾かす。BCで倒壊した
テントもポールが曲がっただけであつたため、意
外と早く修理できた。大本営のメステントは乾か
すとずいぶん軽くなった。個装に関しては、遠征
慣れしている人には当たり前のだろうが、初参
加にとってはびっくりした事があつた。出発時は
多くの個装をプラパールに梱包し事前に発送した

が、帰国時には手荷物および機内持ち込みのみとなる事を知り、個装の一部をTMAに寄付する。結果的にはほぼ全てを持ち帰れたのだが、次回参加する時にはもっとスムーズに作業が進むだろう。

日曜日はラサ〜北京間の直行臨時便で運航されるため、23日の予約をいれる。ところが7人分しか航空券を確保できず、連絡官・通訳・岩瀬さん・川上の4人は成都で乗り換えることが決まった。

8月22日 ラサ 市内観光

3台の車に分乗してポタラ宮殿に向かう。宮殿の階段はかなり急で、しかも高層建築なので順応していない体では少しきついかもしれない。内部は撮影できる所が少ないので見学後、宮殿の外で集合記念写真を撮る。夕方まで自由行動で、皆さん思い思いの買い物を楽しむ。宮殿からヒマラヤホテルまでは距離もあるので、帰りは岩瀬さんと2人で人力車に乗る。

夕食は西藏登山協会の人達との晩餐会である。会場は郵電局の招待所で、久しぶりに冷えたビールを味わえた。食後、3元5角の安カップラーメンを買ってホテルに戻る。中国では、カップラーメンも非常に辛い。

8月23日 ラサ〜成都〜北京

朝5時、寝息が急激に荒くなり始め、ベッドの上で苦しそうにのた打ち回り、吐き気・腹痛・下痢の3拍子が揃ってしまった。おそらく前日の安カップラーメンが当たったのだろう。ヘンな物に手を出してはいけないという基本がまるで成っていなかった。反省しなくては、こうなると、隊全体の足を引っ張る事になる。皆さん、すみませんでした。出発が6時なので早急にロビーへ。直立できず腰を曲げて這うようにマイクロバスに乗り込む。空港でも苦しく、自分で荷物を持ってない。我々4人は成都へ先行する。機内食は見る気すらしないが水を飲めるようになった。成都空港でCMAの主席の曾曙生氏に会い、名刺をいただく。空港でジュース、北京行きの機内ではケーキと、少しづつ食欲も戻ってきた。北京空港で隊長たちと合流しホテルに向かう。さて、問題の夕食なのだが、食堂が日本人を含むある宗教団体のグループで占められ、既に大賑わいだ。我々の登山隊一行は、食堂の片隅のテーブルに案内された。従業

員たちが我々を宗教団体の一員と勘違いしていたのか、食事の終盤に出されるようなスープやフルーツがいきなり届き、食前でありながら既に食事終了の様相を呈しているではないか！通訳を介して従業員に状況を説明するが取り合ってもらえず、まともな食事を口にする事なく食堂は営業終了となった。

8月24日 万里の長城・紫禁城観光、祝賀会
中国観光の目玉である万里の長城と故宮の観光が1日の行程に組まれ、最後には登頂祝賀会まであるという欲張りな日となった、朝8時ホテルを出発し雨の中、万里の長城へ向かう。長城とはいえ、観光可能なのはごく一部。この観光用の部分はコンクリート等で改築されているようだが、雨で滑って歩きにくい所もあった。昼は金殿友誼商城で食事。昨夜の食事内容を帳消しにするかのような気遣いで、なぜか味噌汁が出てきた。記録の分担等のミーティング後、買い物。時間が無いので早急に紫禁城へ。とにかく広い。宝物の展示も多く、時間がとても足りない。閉館後は天安門の広場で時間潰し。風上げを楽しむ人が多い。

夕食は北京ダックでの登頂祝賀会だ。山海の珍味は面白く、中でもサソリのから揚げは絶品だった。登頂者の田村さん・武部さん・山本さんと、本隊を総括して関根隊長が登頂証明書を授与された(記載の標高は7191mだ)。

8月25日 北京〜成田 解散

朝7時にホテルを出る早起きスケジュールだ。空港の税関で無線機のチェックを受けるため、無線機を提示し書類の入った封筒を提出する。ところが相当の職員が封筒を手を持ったまま、いつまで経っても封筒を開けず、検査をしてくれない。



▲ラサ・ポタラ宮殿前にて

しびれを切らした通訳が大声で中を見るように説明したが、今度は職員が通訳に食って掛かる。どうやら封筒の封印を解いて良いのかどうか迷っていたらしい。通訳と職員が10分程やり取りし、ようやく検査が行われた。無線機の機種名と台数を見ただけで、検査そのものは10秒程で済んだ。

東京行と電光掲示された窓口で隊荷を預ける。ここでオペレーターが不慣れな人で、キーを探しながら指一本で売っている。しばしば間違えては訂正する。受付開始から1時間以上経っても1個の荷物も動かない。ついに電光掲示板から東京の文字が消え、フランクフルトなどと掲示されている。出発予定時刻を過ぎている。しかも航空券が1枚足りない。見るに見かねて別の職員が応援にきた。いきなり荷物が流れ始める。時間が遅いので、つい上官らしき人が来て、ファーストクラスの搭乗券が手書きで9枚発行された。大急ぎで出国チェックを受け、飛行機に乗る。実際には6人がファーストに座れ、3人がエコノミーだった。この格差は大きい。

成田に到着し、いろいろな思いを胸に秘め解散となった。
(川上 浩史：記)

◎隊の名称

日本ヒマラヤ協会ニンチン・カンサ1998登山隊

◎隊の構成・役務

隊長	関根 幸次	埼玉	64歳
登攀隊長	伊藤 守	東京	42歳
食糧担当	田村 正勝	東京	55歳
環境担当	長水 洋	札幌	48歳
輸送担当	武部 秀夫	岡山	45歳
医療担当	日南長二郎	広島	42歳
気象担当	山本 強	石狩	42歳
食糧担当	清水 久江	東京	33歳
装備担当	岩瀬 雄二	東京	33歳
通信担当	川上 浩史	大阪	29歳
連絡官	楊 建 國	北京市	45歳
通 訳	楊 國 勇	浙江省	22歳
コック	王 洪 金	四川省	35歳

山の情報誌「岳人」



毎月15日発売 (日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

98年

- ★ 1月号
- 2月号
- ★ 3月号
- 4月号
- ★ 5月号
- 6月号
- ★ 7月号
- 8月号
- 9月号
- ★ 10月号
- 11月号
- 12月号

特 集

ぼくの好きな雪の山小屋で
粉雪わけて爽快山スキー
駅から登るとっておきの山
新緑と残雪を求めて5月の山
山の本、名作をめぐる春山紀行
高層湿原、もう一つの尾瀬へ
夏は北海道の花と溪流へ
真夏に涼を求めて、高原へ
初秋の単独行の山歩き
上信越の紅葉をさぐる
名峰を訪ね、冬枯れの温泉へ
冬山入門、心構えと特選コース

(★は特大号となります)

東京新聞出版局 (中日新聞 東京本社)

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

地域ニュース

《中国》

ロシアと中国西部国境50キロを画定

ロシア外務省は9月3日、約50キロの中ロ西部国境を画定する作業が完全に終了した、と発表した。1994年9月調印の国境画定協定に基づき作業が続いていた。約4200キロの東部国境は、昨年11月に画定が宣言されている。(9.4 朝日新聞)

チョモランマ北西壁撤退

チョモランマ(8,848m)北西壁に単独で挑んでいた戸高雅史(36)さんは、8,500mで断念した。

C1(5,900m)からジャパニーズクーロワールへ取り付いたが、7,100m付近で撤退し、その後グレートクーロワールにルートを変更して9月16日約8,500m地点に達したものの、2晩にわたる寝袋無しのビバークのため体調が万全ではなく、同日中に北西壁を下降し、C1に帰省した。

チャー・オユー登頂

チャー・オユー(8,201m)を目指していた谷口正彦さん(59)と貫田宗男さん(47)は、9月26日、シェルパのニマ・ドルジェ、ミンマ・ツィリ、タシの3名と登頂に成功した。同峰の日本人最高齢登頂者となった谷口さんは、二度にわたるヒマラヤの雪男探検で知られている。また、貫田さんは1991年と94年にエヴェレストに登頂しており、今回は3度目の8千m峰の登頂となった。

カンベンチン北峰初登頂

カンベンチン北峰(7,230m)を目指していた愛媛大学山岳会カンベンチン登山隊(山本武(58)隊長以下5名)が、同峰の初登頂に成功した。

同隊は8月12日、BC(4,650m)を設営。16日までにABC(5,700m)へ荷上げた後、23日からルート作業をしながらC3(7,100m)を設営。30日、先ずC3からカンベンチン主峰(7,2

81m=1982年京都大学学士山岳会隊が初登頂)に登頂。翌31日、森岡郁雄(33)、宮前哲治(29)、平岩剛(22)の3隊員が北峰に初登頂した。翌9月1日には小林正治(28)、巴英雄(24)両隊員も登頂した。

《インド》

核先制不使用を提案

イスラマバードからの報道によれば、16日から同地で始まったインドとパキスタンの外務次官級会議で、インド側は核の先制不使用協定を結ぶことを、パキスタン側に提案した模様。今年5月に両国が核実験をした後に、インドのバジパイ首相が国会で、同協定締結を働きかける発言をしていた。

UN I通信によると、インド側はパキスタン側に、「両国の核実験によって、南アジアの安全保障の環境に新たな一面が加わった。平和を語るにあたって、この現実を考慮しなければならない」と伝え、互いに核兵器を先に使わない合意が必要だと求めた、という。

約1年ぶりの公式協議が始まった16日は、地域の安全保障問題を議題に話し合いが続いた。

(10.17 朝日新聞)

《ネパール》

ネパール首相11月に訪日

外務省は20日、ネパールのコイララ首相が11月3日から6日までの日程で日本を訪問すると発表した。小渕恵三首相との会談、天皇との会談などを予定している。1990年の民主化以降、ネパールの首相が訪日するのは初めて。(10.21 朝日新聞)

エヴェレスト早登り新記録

カトマンズからの情報によると、ネパール人のカジ・シェルパ氏(33)が17日、シェルパ族の同僚と2人で、エヴェレスト(8,848m)にベースキャンプ(5,486m)から無酸素で20時間24分で登る新記録を達成した。ネパール国营テレビが放

映した。

発表によると、16日午後4時にベースキャンプを出発し、17日午前9時にエヴェレスト南峰(8,720m)に到着、午後零時24分に頂上に着いた。これまでの記録は、1990年にフランス人(註:1988年マルク・バタール)が作った22時間29分だった。(10.18 東京新聞)

マナスル北西壁隊撤退

マナスル(8,163m)北西壁に挑んでいた山野井泰史(33)・妙子(42)夫妻は、9月15日北西壁下部で雪崩に遭い、泰史さんが軽傷を負ったため、登山活動を中止した。

ダウラギリ I 峰登頂

ダウラギリ I 峰(8,167m)を目指していた札幌ダウラギリ I 峰登山隊(斉藤勤(50)隊長以下6名)は、9月30日登頂に成功した。登頂したのは斉藤隊長の他、工藤寛(32)、杉山敏彦(28)、下間洋司(28)の3隊員とシェルパ3名の計7名。

サイバル登頂

サイバル(7,021m)を目指していたバーバリアンクラブ隊(野沢井歩(34)隊長以下2名)は、10月7日登頂に成功した。登頂したのは野沢井隊長と岩崎洋(38)隊員の2名で、1963年の同志社大学隊初登頂に次いで日本隊第2登、北面からの同峰への登頂は第3登目。北面への日本隊の入山は初めてである(23頁「サイバル便り参照」)。

《アフガニスタン》

イランの攻撃受け村民7人が死傷と発表

アフガニスタンからの報道によれば、イスラム原理主義勢力タリバーンは10日、イランからの8日の攻撃によって、西部ヘラート州で村民2人が死亡、5人がけがをしたと、同勢力のラジオで放送した。8月にタリバーンが北部の町マザリシャリフでイラン外交官を殺害したことをきっかけに両国国境で緊張が高まって以来、初めて戦闘による死者が確認された。(10.11 東京新聞)

トピックス

中込清次郎さんのピッケル戻る

昨年8月、カラコルムのスキルブルム峰(7,360m)で遭難死した中込清次郎さん(当時50)が登頂に使ったピッケルが見つかり、遺族の元に戻ってきた。中込さんの遺品は時計や日記などわずかな物しか見つかっていなかった。

今年6月、ガッシャーブルムⅡ峰(8,135m)に登頂した石川富康さん(61)が現地のポーターが持っていたのを見つけ、その場でピッケルを買い取った。帰国後、石川さんが中込さんの妻紀子さん(49)に送ってきたもので、ブレードには「中込清次郎 NAKAGOME SEIJIRO」と名前をタイプした黄色いテープが張ってある。中込さんのスキルブルム峰登頂時に撮影した写真と照合し、紀子さんが生還した隊員に確認したところ、登頂に使ったピッケルであることが間違いないとわかった。(10.13 山梨新聞)

ヒマラヤへ雪男探検隊来秋、25年ぶり遠征

世界の屋根、ヒマラヤ山中で「雪男」をもう一度探してみたいと、東京都杉並区の登山家、谷口正彦さん(59)が来秋、25年ぶりにネパールに遠征隊を繰り出す。大手出版社の重役のいすをけて今秋、チョー・オユー(8,201m)に登頂した際、同行のシェルパから最新情報を入手。忘れかけていた未知の存在への好奇心が頭をもたげた。「僕にとって雪男はロマンの世界。ライフワークとして取り組みたい」と、第二の人生の目標に据えて意欲を燃やす。

谷口さんは1971年、8年間勤務した日本テレビの運動部をやめ、学生時代から夢見ていた雪男探検のためネパールを訪ねた。74年にも2度目の探検隊を組み、この時は秋田県の「マタギ」4人も参加させた。2回の遠征で雪男らしい足跡を発見したり、地元民の目撃談などを収集したりしたが、写真撮影などの「直接証拠」は得られなかった。

その後、アフリカのジャングル踏査などの探検にも取り組んだが、「家族を養うため」80年に福

武書店（現ベネッセコーポレーション）に入社、常務にまでなった。しかし、「一度しかない人生、このまま終わりにたくない」と昨年、慰留に努める社長を説き伏せて退社し、今秋チョー・オユーに挑んだ。

この時、ロールワリン地方のシェルパ、ナワ・ユンデンさん（47）から同地方に伝わる雪男情報を聞いた。「少女がさらわれた」「家畜のヤクが殴り殺された」……。前回の搜索で訪ねなかった未踏査の地区のうえ、ユンデンさんの熱のこもった話しっぷりに心が動いた。

谷口さんは標高4千～5kmの山岳地帯でテント生活をしながら、ユンデンさんをガイド役に地元の古老らから言い伝えなどを収集する予定。写真撮影も成功させたいといい、現在一緒に行く仲間を募っている。

谷口さんがこれまでに集めた情報によると、雪男には身長2mの「イエティ」と同1.2m「ボンゴ・マンチェ」の2種類がいるともいわれ、ともに直立歩行し、森林に住むと想像されている。

「小型の方はヒマラヤ、ラングールなどのサルを見間違っただけだと思う。可能性のあるイエティは、類人猿と人間をつなぐ輪のような生き物かもしれない。生息が確認できれば世紀の大発見になる」と夢を膨らませる谷口さんは、「私を含め、多数の探検隊が雪男を探したにもかかわらず確実な写真さえない。自然を敬うシェルパたちの共同幻想かもしれないが、それでも民族学的に価値がある」と意気込んでいる。（10.18 朝日新聞）

インフォメーション

第一回関東地区ヒマラヤ研究会開催

気軽に参加でき、本音でヒマラヤ登山のノウハウを語りあえる研究会にしたいと、関東地区の各岳連の海外委員が中心となって設立した研究会。

記

日 時：12月5日（土）13時～6日（日）14時

場 所：国立婦人教育会館

〒366-0292 埼玉県比企郡嵐山町大字菅谷728

☎ 0493-62-6711 FAX 0493-62-6720

東武東上線武蔵嵐山駅下車徒歩15分
参加費：8千円（資料代、5日夜懇親会費込）

問い合わせ先：

〒338-0826 浦和市大久保領家165-11

関東ヒマラヤ研究会事務局 菅野修一

☎ 048-853-2657（FAX兼、電話による問い合わせは夜間のみ）

尚、登山隊報告としてサイパル（バーバリアンクラブ）、マナスル北西壁（山野井泰史）、ムスターグ・アタ（栃木県岳連）、マカルー（埼玉岳連）を予定している。

第11回日山協海外女性懇談会開催

過去10年間の女性による海外登山の変遷を振り返りながら、今後どのような方向に進もうとしているのかについて考える。

記

日 時：12月10日（木）18時30分～21時

場 所：岸記念体育館

東京都渋谷区神南1-1-1

JR原宿駅下車徒歩5分、JR渋谷駅下車徒歩15分、地下鉄千代田線明治神宮前下車徒歩7分

参加費：1,500円（資料及びお茶代含む）

問い合わせ先：

（社）日本山岳協会事務局

〒150-0041 渋谷区神南1-1-1 岸記念体育館内

☎ 03-3481-2396 FAX 03-3481-2395

内 容：1）基調講演「女性海外登山の歩みとこれから」

2）遠征報告「私たちの10年とこれから」

「パキスタン登山の手引」作成

イスラマバードの旅行会社日パトラベル社が、この程パキスタン登山の手引に関するパンフレットを作成した。

登山申請が比較的簡単な上に、手続のほとんどをエージェント任せにできる便利さも手伝ってか、近年パキスタンを訪れる登山隊は増加傾向にある。しかしこの利点が裏目に出て、隊の責任者ですら

一連の申請手続の流れを理解しておらず、現地で不要なトラブルを起こす隊も出てきている。

観光省による登山規則以外の細かい注意事項もわかりやすく列挙されており、大変参考になる。

同社のクライアント用に作成したパンフレットではあるが、希望者には500円（送料込）で配布する予定とのこと。

問い合わせ先（日本語で可）

Nippa Travel P・O・Box 2253

House No.1-A. St.22, F7/2, Islamabad,
PAKISTAN

Tel 92-51-818256,824556 FAX 92-51-272958

BOOKS

インド・ヒマラヤ探訪 秘境キンノールの山々を訪ねて

1997年、インド・ヒマラヤのファワラ・ラング（6,349m）に登頂したぶなの会の登山とトレッキングの報告。

1992年、この厳しい入域制限が敷かれていたキンナウル（キンノール）の地がトレッキングの舞台として条件付で外国人にオープンされるや、欧米からのトレッカーがこの地に押し寄せた。この地域の山々が外国登山隊にオープンされたのはその4年後の1996年からで、同隊はオープン後の日本隊第一号であろう。因に、当協会では1986年、IMFと合同でキンナウルの盟主ジョー・カンダン（6,473m）に女性登山隊を送り出したが、インナー・ライン許可取得の厚い壁の前に、目指す山を垣間見ただけで涙を飲んだ経験がある。

編集を担当した鬼木隊員が、自身の印刷業者としての再出発を記念して取り組んだというこの報告書は、92頁中43頁がカラー写真で占められており、その写真を眺めるだけでも楽しい。

一村が壊滅状態に陥った大雨のために道路が寸断、大迂回を強いられながらも精神的余裕の感じられる行動は、今井隊長以下インド事情に詳しいメンバーの多いぶなの会故であろうか。

B5判 92頁 内カラー43頁 2,600円（税込）
連絡先: 〒198-061 青梅市畑中3-892-3 今井正史

アライン 地平線の旅人

「旅」という一線を越え、広く大きな地球体験を行なっている新聞記者、報道カメラマン、登山家、の3名がそれぞれの体験を綴ったフォト・エッセイである。

それぞれのフィールドは異なるが、その底に流れるのは死と隣り合わせた生命の燃焼であり、感動を求めての旅でもある。

フィールド1 大地の呼吸 として新聞記者の江本嘉伸氏がモンゴルとチベットを語る。

山との出会い、行動を支える旅先でのランニング、地平線会議誕生にふれる。一方の柱である写真では、モンゴルでの子羊の誕生から遊牧民の生活、そして厳しい気候による死。チベットでは東部の森の村を訪ね、信州の山麓を彷彿する新雪の山肌と屋根に石を置いた木造りの家。そして17歳の少女の笑顔は驚くほど美しい。

フィールド2 戦場 ではスクープを求めて撮り続けるストリンガー（フリーランスの戦場カメラマン）の遠藤正雄氏が熱き思いを語る。

ストリンガーの道へ進む動機はユージン・スミスの硫黄島の写真だったと言う。そして大学を中退してベトナム、フィリピン、アフガニスタン、チェチェンと駆け巡る。そこは為政者の一言で戦いの場とは成りえなかったであろう、普通の密林であり、砂漠であり、市街である。遠藤氏は「感動」を求めて撮り続けてきたと語り、どれだけ人に感動を与える写真が撮れただろうか、とも考える。当然と言うべきか本書の写真には笑顔はない。被写体となった彼等、彼女等に本書を見せたらどのような反応を示すであろうか。

最後の章はフィールド3 単独 登山家の戸高雅史氏が生い立ちから、チョモランマ北西壁単独遠征までを語る。

故郷の自然の中での冒険から、大学に入り探検部と出会い、未知なるものを求めて行動する喜びに熱中する。その中でも目標を求めて登山に惹かれていく。社会人山岳会でアンナプルナII峰南壁に参加するが、遠征は雪崩に巻き込まれて挫折。一時はヒマラヤ登山をやめる決心をするが、凝縮

された生命の輝きを忘れることが出来ずMt.デナリに向かう。デナリは成功し自分の進むべき道と出会う。その後のヒマラヤ遠征で仲間を失い、その極限の中からよりシンプルな登山を目指すとともに、「自分が自分らしくあること」を掲げた青少年対象の野外学校を主宰しつつ、K2の単独無酸素登頂。チョモランマ北西壁単独遠征と、内なる熱の渦巻きを生の本質として生きたいと語る。

主題の「A L I N E」は、3名の著者が超えた「一線」を意図したとの事である。写真はカラー・モノクロと巧みに構成され、見応えがある。欲を言えば地図の部分に世界地図を入れるなど、もうひと工夫がほしかった。(出口 當)

四六版 255頁 企画 (株)ノヴリカ
発行 ソニー企業(株) 発売 (株)求龍堂
1998年7月20日刊 価格 1,800円+税

ヒマラヤから

サイバル便り

No.1

ナマステ!

皆様お元気でしょうか? 現在スルケトを出て15日目、カトマンズを出て17日目、フラム地方のシミコットにやっと到着し、マナサロワール・ホテルに投宿し、このレターを書いています。久々のビールとチャンを呑んで本日はレスト。(中略、9月4日までは前号の岩崎洋便りを参照)

9月6日 Gumgariより Mug・カルナリ川を下りシミコットへ向かうルートを辿る。Mug・カルナリ川沿いのルートは、村の数も減り道も細くなった。このルートも日本人としてのトレースは初めてかも? こうしてMug・カルナリ川より山を越えて、Fumra・カルナリ川へとシミコットへのダイレクトのルートを辿り、10日に待望のシミコットに到着することができました。飛行機で一時間の所、15日間歩くのは、むしろ贅沢な体験ができたと思っています。3人共すっかり西ネパールの魅力にはまってしまいました。

11 Sep.98 シミコットにて 野沢井 歩
P. S

BC一日手前のトトリア・カルカと呼ばれる所

でテント泊。なんとかシミコットからうまくBCへ入るトレールに入ることが出来、明日、北サイバル氷河の末端にBC予定です。

No.2

ナマステ!

皆様お元気でしょうか? 9月14日BC着。今年はネパールの天候は不順でルートもうまく伸びず、BCでダラダラ過ごす日々が続きました。ルートも二転三転と変更し、天候が少し安定してきた10月3日より最後の行動に向かい、10月4日アタックキャンプをなんとか設置、10月5日一回目のアタック、しかし頂上直下で敗退。

10月6日ファイナルで一泊レストし、10月7日二回目のアタック。古谷が一回目のアタックで眼が見えなくなったので不安を覚え、彼は二回目のアタックを断念。私と岩崎さんでPeakを目指しました。12時19分無事登頂。

ナムナニを始めチベットの山々、西ネパールの山々が望めました、と書きますが、実際、二回のアタック共ひどい強風で、休んで景色をのんびりといった余裕もなく、朝の3時よりひたすら登ったといった感じでした。

10月18日BCへ戻り、14日シミコット~ネパールガンジへ空路、15日朝ローカルバスのナイト便でカトマンズに戻ってきました。

皆軽い凍傷ですが元気です。 野沢井 歩

お願い:引き続き国際山岳博物館建設支援金を募っております。まだ目標額に達しておりません。

郵便振替:00140-4-13926 ポカラ国際山岳博物館連絡協議会(通信欄にHAJ会員と記載下さい)

東京集会のお知らせ

日時 11月30日(月)午後7時~
内容 カバン峰偵察隊の報告です。
場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

■ 寸 感 ■

最近、来年の各国への登山申請に関する問い合わせが増えてきた。中にはパスポートの申請方法や「自分達が登れる適当な未踏峰」を教えて欲しいというものまである。また、過去の登山報告書や当協会の手引書の情報が間違っていると電話口で怒る御仁もいる。活字となった情報はその時点で既に過去のものであり、発刊物はいくまで参考書である。それを基に、最新情報を収集して肉付けをしていく事が登山・踏査の基本であろう。

関東地区では各岳連の海外委員が中心となって新たにヒマラヤ研究会を開催していくという。海外登山に関する研究会を開催している地方や団体も結構ある。そのような場に足を運び、情報交換や情報収集をすることをお勧めしたい。(寺沢)

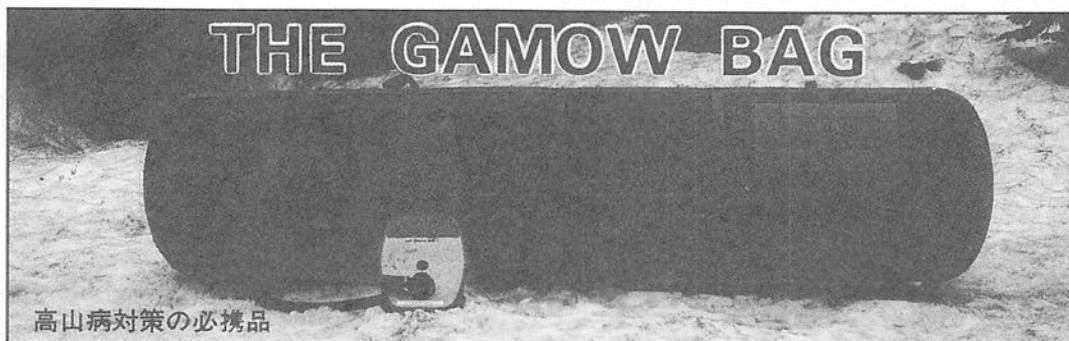
事務局日誌 (10月)

- 9日(金) ヒマラヤ324号発送
10日(土) カバン峰偵察隊出発
16日(金) 国際山岳博物館協議会(寺沢)

- 22日(木) 故フカム・シン氏令嬢アルパナ・パ
ンティさん来日(寺沢)
26日(月) 東京集会(9名)

ヒマラヤ No.325 (12月号)

平成10年11月10日印刷 10年12月1日発行
発行人 稲田 定重
編集人 山森 欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店 / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店 / 〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店 / 〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店 / 〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店 / 〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店 / 〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)5707
- 高崎店 / 〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店 / 〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店 / 〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブライカ店 / 〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブライカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店 / 〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店 / 〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店 / 〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店 / 〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店 / 〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店 / 〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店 / 〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー) / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所 / 〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004